

## シカゴランド・ニューース

日本の文化をシカゴで味わう

## 『年忘れ餅つき大会』

シカゴ・ラグビー少年団

『年忘れ餅つき大会』が12月13日、在シカゴ総領事館文化広報センターで開催された。主催したのはシカゴ・ラグビー少年団で、少年団の家族、友人、日本に郷愁を寄せる人など、約150人が集まり賑わった。

少年団といっても20代から50代の、少年の心を持つ社会人の集まりで、餅つき大会の目的は①次世代の子ども達にラグビーを普及させること、②人々に日本の文化をシカゴで味わってもらおうこと、③家族の懇親会。

コーナーには臼と杵がセットされ、子ども達が代わる代わる杵を持ち、日本でもなかなか経験できない『餅つき』を楽しんだ。テーブルにはつきたての餅が並び、参加者らはあんこ、生醤油、砂糖醤油



日本でもなかなか経験できない餅つきを子供たちは代わる代わる楽しんでた



サンタクロースに扮した岸川団員と腕相撲をとる子供たち

など好みで味付けし、海苔や大根下ろしを添えて丸餅をほおばった。

会場奥では団員の岸川さんがサンタクロースの衣装をまとい、子ども達と腕相撲をとった。岸川さんは毎回転んで負ける子ども達の強さを褒め、賞品の小型ラグビーボールを渡した。

同餅つき大会では、イラクの子ども達のために募金も行われた。イラクで殺害された奥克彦大使は早稲田大学のラグビー部で活躍した人で、シカゴ・ラグビー少年団にとっては、仲間も同然だった。1年後輩の寺林努団長は、グラウンドを一緒に走った仲だった。危

険なイラクに身を置き、ラグビーの不屈の精神を持ってイラクの子ども達の未来のために痛心し、志し半ばで倒れた奥大使の死は、少年団のメンバーに深い感銘を与えた。

募金は「全ての子どもに、人としてかくあるべし」ということを教えるのはラグビーブレイヤードある以前に大人としての勤め。男の子には義の心を、女の子には慈の心を、闘いの後のノーサイドの心を。奥大使は、その身を捧げて示してくれた」と、田代博さんが中心になって進めた。田代さんは子ども達に話をして募金箱を作らせた。他のメンバーも、普段親子であま

り話さない内容なので教育に良い機会だと、募金活動に協力した。

会場では沖縄の伝統文化に触れることの少ない子ども達のためにと、アヤラ・タエコさんを始め沖縄県人会のメンバーが太鼓や踊り、三線（蛇味線）や歌を披露し、子ども達を楽しませた。

同餅つき大会のクライマックスは、ラグビーをテーマにしたスクールウォーズのビデオ上映会。初めに番号5を付けた現役時代の寺林団長のビデオが上映され、会場からは歓声が上がった。

▼6面より

## 餅つき大会

スクールウォーズは1984年から85年にかけて放映されたテレビドラマで、京都伏見工業高校で起きた実話を基に制作されたもの。不良の巣だったラグビー部を立ち直らせ、7年後にはラグビーの甲子園と言われる花園大会で奇跡の優勝を成し遂げさせた山口良治教諭と生徒達の熱い闘いを描いている。熱血教諭の苦悩と愛、高校生の心に吹き荒れる「嵐」をラグビーを通して描いたストーリーは、誰の胸にも感動を呼び起す。

(www.boochanweb.com/  
School/mk/に詳細)

テレビドラマの中で、市立川浜高校が城南高校と花園で優勝を争うシーンは、伏見工業高校と大阪工業高校の実戦を再現したもの。その時、大阪工業高校の有力ラグビー選手で、ケガのためにスタンド観戦を余儀なくされた木村昌史さんは、現在シカゴ・ラグビー少年団の団員となっている。木村さんは子どもを信じて、愛し、待つこと、「信は力なり」という山口良治教諭の言葉を紹介し、同教諭を称えた。

ラグビーは好プレーをし



故・奥大使を偲び、イラクの未来ために募金を集める子供たち



沖縄の謡を披露する沖縄県人会の皆さん。タエコ・アヤラさん(右)

てもガッツポーズをどろくともなく「勝ちたい」という熱意のもとに黙々とチームプレーに全力を注ぐ命に関わる重荷を克服した団員長老の脇孝二さんは「死を感じた時どこに気持ちを持っていくかと思つた。最後までベストを尽くすというラグビーの精神で乗り越えた」と静かに語つた。

ビデオ上映後は、あんこ餅

▼6面より

## 座頭市

当時の日本映画界は、大手5社(東映、東宝、大映、日活、松竹)がしのぎを削つており、役者は一つの映画会社と契約を結ぶと他社の作品に出演する事はタブーとされていた。当時、東宝では「用心棒」と言う座頭市と似たテーマの映画が人気を呼んでおり、シリーズ後半で座頭市と用心棒が決闘するという、大映と東宝の共同制作が行われた。競合2社による共同制作は、この時代には非常に珍しい事であったと青木氏は付け加えた。

映画終了後に質疑応答の時間が設けられた。特に観客が関心を持っていたのは現在日本で上映中の北野武監督主演の「座頭市」についてだったが、青木氏は「もし皆さんが僕と同じくらいのおリジナル座頭市狂だったら、北野バージョンはオ리지ナル程は楽しめないかも知れませんが」と語った。

勝氏が座頭市を演じていた頃の時代劇俳優は、全員居合の殺陣(たて)ができる事が求められていた。青木氏は、特に歌舞伎出身の勝氏の殺陣の上手さを絶賛し、「それを北野氏が再現できていたとは思えない。しかし北野武監督の新作だ、と思つて見れば非常に楽しむ事ができた」と述べた。60年代、7

の中にワザビや南磨き粉が入ったひどい餅を混ぜ、誰がひどい餅を食べたかを当てるゲームが行われた。少年団のメンバーが平気な顔をして餅を食べてみせる。中には「ザ・がまん」というテレビ番組で8位になったという強者もあり、ゲームに参加した子ども達を驚かせた。正解した子ども達には、色々な賞品が配られ、「年忘れ餅つき大会」は最後まで賑わった。

0年代の芸術に通じ、座頭市狂と自称する青木氏ならではのコメントだった。

ハイドパークから訪れたクレイグ・ハリスさんとリチャードクックさんは、1973年、ウイスコンシン大学時代に授業で座頭市を見た事があり、今回懐かしさに駆られて足を運んだ。2人が学生時代に見たのは用心棒との対決で、それにくらべると「市が非常に若く見えた」と感嘆を述べた。また、今回の映画シリーズは「講演が非常に参考になった。特に映画業界の裏話が聞けて、座頭市を違つて観て見る事ができた」と語った。映画上映後も2人は青木氏と座頭市談義

